

廿七、眞に人々は波濤の洶湧するを聴きたりき
實にその洶湧のはねかへすをも聞きたりき、雷の
如き響は其洶湧を報告したるなりき、其處に愛ぐ
るしき眼もて、身をかいめて一心不亂に氣づかは
しげに瞰下しつゝあるは、皇女なりき、返り來れ
り、水は、凡て湧き返り來れり、誠に水は潔々と
して下りつ又沙々として高まり來りつれど、而か
も、彼若武者をば再び捧げ來らざりしなり。

この一篇先月日本赤十字社總會に出張の節式の始を待つ間に
鉛筆もて、手帳に起草したるもの、其儘に打ち捨てんもさす
がに惜しき心地のせらるゝまゝ寫し取りて御覽に入れ候

相 賀 調 雨

袴 の 賛

袴は袴、汝三尺未滿の身を以て、日本赤十字社の
總會に列り、我國固有の禮服を代表して、燕尾服

フロクコートに敢て遜色無きは、予の敬服する所
なり、しかのみならず年立かへるあしたの廻禮に
も汝が随伴せざれば吉例を欠き、太郎が五歳の祝
ひも汝の名を冒さねば、千歳飴も配り榮えせず、
鶴が岡の社頭に源廷尉を追慕し、右幕下の權威に
媚ざりしは靜御前が節操の舞ひ袴、少しく裾は截
り飛ばされても、供不戴天の仇を討とめしは、無
三四が至孝の曠れ袴、年男の袴には鬼も恐れては
しり、五人囃子の袴揃ひは雛壇に笑顔を競ふ、春
の日の永きも鞠袴には暮るを惜み、番袴はかぬ日
は却て内職の楊枝に間がし、露にもめげぬは鶴籠
脇の股立ち、襷襜の正しきは裁縫師の敏腕、花簪
へ贈る結納は、必袴地を筆の首めとし、年の尾の
進物には牛蒡にも袴を着せたり、袴よ袴笑ふ勿れ
汝が片々の穴に兩脚を突き込み施主の列にふく

れしはあに弟子の滑稽、袴よ袴怪む勿れ汝が股
 に兎家鶏をも恐ばせて、観客の眼をくらませしは
 蝶齋が手練のはや業、團州の勸進帳の袴は容堂
 公の拜領を誇り、足袋福草履に袴の態度嚴そかな
 るは有繫に庄之助の行司振りなり、毛見の出迎ひ
 には貧慾名主も袴の腰を低くし、上野袴腰のくう
 やは珍菓の調製に名高し、長岡商店の仕入袴は販
 路頗る廣く、手首の色には似もやらで紺屋の袴は
 いつも白し、平袴もすち高に改造されて廢物利用
 を説き、徳利も袴の保護にあつがりて轉倒のかそ
 れ無きを得たり、袴よ袴枚舉にいとまなき、汝が
 一門類屬、箸の袴灰吹の袴等に至る迄、一として
 世にもてはやされぬは無きが中に、陶淵明の秋袴
 を厭ひしは東籬に菊を愛するのみやび心と見て怒
 すくもあれど、獨りゆるし難きは、海老茶袴の

自墮落なる綻ひにそわる

枯てまで香をたもちけり藤ばかり

武士の

矢なみつくらふ

籠手の上に

あられたばしる

那須の篠原

源 實 朝